

# 学校教育における食に関する 指導の評価について（第2報）

The evaluation of guidance concerning shokuiku  
srp (food and nutrition education)  
in the school education (Part 2)

並 河 信太郎

## は じ め に

「学校教育における食に関する指導の評価について（第1報）」において、食に関する指導の経緯と評価の必要性について、明らかにしてきた。食に関する指導の「推進の評価」は指導前後の給食での喫食状況や食生活全般の状況の変化の調査、指導体制の確立状況等で示されている。

今後、食に関する指導の内容を確立していくためには、指導により児童・生徒に培われた学力の状況を明らかにすることが必要である。食に関する指導は全教育活動で取り組まれることから、教科等を横断した評価を実施していくことが必要である。

本論では、食に関する指導の学習評価の現状、観点別学習状況の評価を中心にまとめた。

## 1 食に関する指導の学習評価の必要性

### （1）学習指導要領における食に関する指導

食に関する指導は、継続性に配慮し、意図的に学校給食を教材として活用しつつ給食の時間をはじめとする関連教科等における食に関する指導を体系付け、学校教育活動全体を通じて総合的に推進する。国はこれを「学

校における食育を推進すること」と定義している。

食に関する指導の中心である給食指導は、小学校学習指導要領において、昭和33年（1958）に学校行事に位置づけられた。昭和43年（1968）、特別活動の学級指導に、さらに、平成元年（1989）、特別活動の学級活動に位置づけられている。中学校学習指導要領でも実施時期は異なるが、小学校学習指導要領と同様に位置づけられている。

平成20年1月17日の中央審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、食育について次のように示している。

---

○食生活の改善や睡眠時間の確保といった生活習慣の確立は「生きる力」の基盤であり、その第一義的な責任は家庭にある。しかしながら、家庭の教育力が低下する中で、近年、子どもたちに偏った栄養摂取、朝食欠食等の食生活の乱れや肥満傾向の増大などが見られ、食生活の乱れが生活習慣病を引きおこす一因であることも懸念されており、学校教育においても、子どもたちの生活や学習の基盤としての食に関する指導の充実が求められている。

○食に関する指導については、食事の重要性、心身の成長や健康の保持・増進の上で望ましい栄養や食事の摂り方、正しい知識・情報に基づいて食品の品質及び安全性等について自ら判断できる能力、食物を大事にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心、望ましい食習慣の形成、各地域の産物、食文化等を理解することなどを総合的にはぐくむという観点から推進することが必要である。

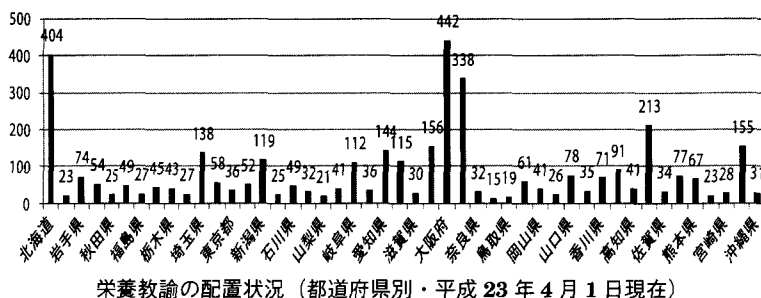
○そのため、食育という概念を明確に位置付け、発達の段階を踏まえつつ、各学年を通して一貫した取組を推進するとともに、給食の時間や家庭科、技術・家庭科などの関連する教科等において、食に関する指導の内容の充実を図り、学校の教育活動全体で取り組むことが重要である。その際、各教科等の指導に当たっては、子どもたちが実際に食する学校給食を教材として積極的に活用することが重要である。また、学校における食育の推進には、家庭、地域と連携を図ることが重要である。

この答申に基づいて、平成 20 年 3 月に、新学習指導要領が告知された。新学習指導要領総則 3 の体育・健康に関する指導において、新たに学校における食育の推進及び安全に関する指導を加え、発達段階を考慮して、体育科、保健体育科の時間はもとより、家庭科、技術・家庭科、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うなど、学校教育活動全体として取り組む必要があるとしている。特に、学校における食育の推進においては、偏った栄養摂取などの食生活の乱れや肥満・痩身傾向が見られるなど食に起因する健康課題に適切に対応するため、児童生徒が食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けることにより、生涯にわたって健やかな心身と豊かな人間性をはぐくんでいくための基礎が培われるよう、栄養のバランスや規則正しい食生活、食品の安全性などの指導が一層重視されなければならないとしている。また、これらの心身の健康に関する内容に加えて、自然の恩恵・勤労などへの感謝や食文化などについても教科等の内容と関連させた指導を行うことが効果的であるとし、食に関する指導に当たっては、栄養教諭等の専門性を生かすなど教師間の連携に努めるとともに、地域の産物を学校給食に使用するなどの創意工夫を行うつつ、学校給食の教育的効果を引き出すよう取り組むことが重要であるとしている。さらに、体育・健康に関する指導を効果的に進めるためには、学校の全体計画を作成し、地域の関係機関・団体の協力を得つつ、計画的、継続的に指導することが重要であるとしている。

## (2) 学校教育における食に関する指導の中核となる栄養教諭の配置

栄養教諭は平成 16 年の学校教育法等の一部改正により、新設された第 3 の教育職である。その趣旨は、指導体制の充実をはかることである。想定される役割は、食に関する指導と学校給食の管理である。食に関する指導は、①食に関する指導の連携・調整 ②教科・道徳・総合的な学習の時間・外国語活動・特別活動における食に関する指導 ③個別相談指導の三つがある。特に、食に関する指導の連携・調整は、学校の中で推進の中核となる役割が期待されている。

## 学校教育における食に関する指導の評価について（第2報）



栄養教諭の配置は都道府県の裁量とされているため、当初は配置が進まなかったが、徐々に配置が進められ、平成 23 年 4 月 1 日現在で 3853 名が配置されている。

栄養教諭は、食に関する指導の連携・調整を行うことが期待されており、学習評価の推進をはかる役割が期待される。

### (3) 食に関する指導の学習評価の現状

食に関する指導の評価は、文部科学省「食に関する指導の手引（第 1 次改訂）」（平成 22 年 3 月）において、食に関する指導の推進の評価が示されている。ここでは、「食育の推進の成果を検証するためには、各教科等における個々の食に関する指導に対する評価ではなく、全体としての食育の推進体制等の評価を行う」としている。食に関する指導は、関連する教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動等において、教科等のねらいに沿って指導が行われることから、教科等のねらいに対する評価を実施する。そこで、食に関する指導の学習評価をどのように実施するのが課題である。

## 2 学習評価の経緯と基本的な考え方

学習評価の基本的な考え方については、中央教育審議会で「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成 23 年 3 月 24 日）がとりまとめられ、この報告に基づいて文部科学省より「小学校、中学校、高等学校

及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」(平成 22 年 5 月 11 日)の通知が出されている。

そこで、中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」に示されている学習評価の基本的な考え方、小・中学校における学習評価の経緯、評価の観点に対する考え方は次のとおりである。

## (1) 学習評価の基本的な考え方

学習評価は、学校における教育活動に関し、子どもたちの学習状況を評価するものである。現在、各教科については、学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評定とを、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施することが明確にされている。学習評価には、このような目標に準拠した評価のほか、学級・学年など集団の中での相対的な位置付けに関する集団に準拠した評価や、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない子どもたち一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する個人内評価がある。

## (2) 小・中学校における学習評価の見直しの経緯

学習指導要領の改訂	学習指導要領改訂のねらい	学習評価	各教科の評価の観点
昭和 52 年	基礎的・基本的な事項を確実に身に付けられるよう教育内容を精選し、知・徳・体の調和のとれた発達	・引き続き、集団に準拠して評価する評定 ・目標に準拠して観点別学習状況の評価の実施	○関心・態度
平成元年	社会の変化に対応し主体的に生きていくことができる資質や能力の育成の重視	・集団に準拠して評価する評定 ・目標に準拠して実施する観点別学習状況の評価	○関心・意欲・態度 ○思考・判断 ○技能・表現(または技能) ○知識・理解
平成 10 年	変化の激しい時代を担う子どもたちに必要な「生きる力」を育む	・目標に準拠して実施する評定 ・目標に準拠して実施する観点別学習状況の評価	○関心・意欲・態度 ○思考・判断 ○技能・表現 ○知識・理解 ※国立教育研究所より評価規準及び具体例が示されている。

平成20年	「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視	・目標に準拠して実施する評価 ・目標に準拠して実施する観点別学習状況の評価	○関心・意欲・態度 ○思考・判断・表現 ○知識・理解お詫び技能
-------	---	--	---------------------------------------

### （3）評価の観点に関する考え方

新しい学習指導要領においても「生きる力」の理念を引き継いでいること等をかんがみれば、現在の評価の観点を大きく見直す必要はない。一方で、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等をいわば車の両輪として相互に関連させながら伸ばしていくとともに、学習意欲の向上を図るという改訂の趣旨を反映し、学習指導と学習評価の一体化を更に進めていくため、学力の3つの要素を踏まえて評価の観点に関する考え方を整理することとする。

現在の評価の4観点と学力の3つの要素との関係では、教科によって違いはあるものの、「知識・理解」及び「技能・表現」が基礎的・基本的な知識・技能を、「思考・判断」が知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を、「関心・意欲・態度」が主体的に学習に取り組む態度を、それぞれ踏まえているものとしておおむね整理ができると考えられる。

新しい学習指導要領においては、思考力・判断力・表現力等を育成するため、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動を重視するとともに、論理や思考等の基盤である言語の果たす役割を踏まえ、言語活動を充実することとしている。これらの能力を適切に評価し、一層育成していくため、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点（以下「思考・判断・表現」という。）を設定することが適当である。

以上を踏まえ、新しい学習指導要領の下における評価の観点について、基本的には、基礎的・基本的な知識・技能については「知識・理解」や後述する「技能」において、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等については「思考・判断・表現」において、主

体的に学習に取り組む態度については「関心・意欲・態度」においてそれぞれ評価を行うこととして整理する。

また、一部の教科においては、現在の評価の観点について、観点間の区別が付きにくいとの指摘があり、そのような指摘のある観点についても、併せて見直すことが適当である。

#### ①「知識・理解」及び「技能」の評価に関する考え方

「知識・理解」は、各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうかを評価するものである。新しい学習指導要領の下においても、従来の「知識・理解」の趣旨を踏まえた評価を引き続き行うことが重要である。

今回、「技能・表現」に替えて示す「技能」は、各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するものである。教科によって違いはあるものの、基本的には、現在の「技能・表現」で評価している内容は引き続き「技能」で評価することが適当である。すなわち、算数・数学において式やグラフに表すことや理科において観察・実験の過程や結果を的確に記録し整理すること等については、現在「技能・表現」において評価を行っているが、同様の評価は今後「技能」において行っていくこととなる。

なお、今回、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点として「思考・判断・表現」を設定することから、当該観点における「表現」との混同を避けるため、評価の観点の名称を「技能・表現」から「技能」に改めることとしている。

#### ②「思考・判断・表現」の評価に関する考え方

「思考・判断・表現」は、それぞれの教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するものである。学習指導要領等に示された思考力・判断力・表現力等は、学校教育においてはごくむ能力を一般的に示したものであり、そのような能力を育成するという目標の下、各教科の内容等に基づき、具体的な学習評価を行うための評価の観点が「思考・判断・表現」である。

「思考・判断・表現」として、従来の「思考・判断」に「表現」を加えて示した趣旨は、この観点に係る学習評価を言語活動を中心とした表現に係る活動や児童生徒の作品等と一体的に行うことを明確にするものである。このため、この観点を評価するに当たっては、単に文章、表や図に整理して記録するという表面的な現象を評価するものではなく、例えば、自ら取り組む課題を多面的に考察しているか、観察・実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動等を通じて評価するものであることに留意する必要がある。

このように、「思考・判断・表現」の評価に当たっては、それぞれの教科の知識・技能を活用する、論述、発表や討論、観察・実験とレポートの作成といった新しい学習指導要領において充実が求められている学習活動を積極的に取り入れ、学習指導の目標に照らして実現状況を評価する必要がある。

「思考・判断・表現」の評価については、全国学力・学習状況調査の「主として『活用』に関する問題」を参考にして作成した適切な問題を用いて評価を行うことも有益である。ただし、「思考・判断・表現」の評価は、そのような問題を一定の制限時間内に解決し、記述できるかどうかのみを評価するものではないことに留意し、様々な評価方法を取り入れることが重要である。

また、この観点については、指導後の児童生徒の状況を記録するための評価を行うに当たっては、思考・判断の結果だけではなく、その過程を含め評価することが特に重要であることに留意する必要がある。

なお、評価の観点である「思考・判断・表現」の「表現」は、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動等において思考・判断したものと、その内容を表現する活動とを一体的に評価することを示すものである。これは、例えば、学習指導要領の音楽、図画工作、美術の各教科において示す領域の一つであり、歌唱、器楽、絵、デザイン等の指導の内容を示す「表現」とは異なるものである。



### ③「関心・意欲・態度」の評価に関する考え方

改正教育基本法においては、学校教育において自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視することが示されるとともに、学校教育法及び学習指導要領の改正等により、主体的に学習に取り組む態度が学力の3つの要素の1つとして示されている。また、我が国の児童生徒の学習意欲について課題がある状況を踏まえると、学習評価において、児童生徒が意欲的に取り組めるような授業構成と継続的な授業改善を教師に促していくことの重要性は高い。さらに、主体的に学習に取り組む態度は、それをはぐくむことが基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等の育成につながるとともに、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等の育成が当該教科の学習に対する積極的な態度につながっていくなど、他の観点に係る資質や能力の定着に密接に関係する重要な要素でもある。

これらのことを踏まえれば、「関心・意欲・態度」について学習評価を行い、それをはぐくんでいくことは引き続き重要である。

「関心・意欲・態度」は、各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するものである。

評価に当たっては、各教科が対象としている学習内容に対する児童生徒の取組状況を通じて評価することを基本とし、他の観点と同様、目標に照らして「おおむね満足できる」状況にあるかどうかの評価を中心とすることが適当である。

具体的な評価方法としては、授業や面談における発言や行動等を観察するほか、ワークシートやレポートの作成、発表といった学習活動を通して評価することが考えられる。その際、授業中の挙手や発言の回数といった表面的な状況のみに着目することにならないよう留意する必要がある。

各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度をはぐくむことは、他の観点に係る資質や能力の定着に密接に関係するものである。教師の指導により、学習意欲の向上はみられたものの、その他の観点について目標の実現に至っていない場合は、学習

指導の一層の充実を図ることが重要である。その際、個人内評価を積極的に活用し児童生徒の学習を励ますことも有効である。

#### （4）各教科の評価の観点

各教科の観点は、文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」で次のとおり示されている。

国語	国語への関心・意欲・態度	音楽	音楽への関心・意欲・態度
	話す・聞く能力		音楽表現の創意工夫
	読む能力		音楽表現の技能
	言語についての知識・理解・技能		鑑賞の能力
社会	社会的事象への関心・意欲・態度	図画 工作	造形への関心・意欲・態度
	社会的な思考・判断・表現		発想や構想の能力
	観察・資料活用の技能		創造的な技能
	社会的事象についての知識・理解		鑑賞の能力
算数	算数への関心・意欲・態度	家庭	家庭生活への関心・意欲・態度
	数学的な考え方		生活を創造工夫する能力
	数量や図形についての技能		生活の技能
	数量や図形についての知識・理解		家庭生活についての知識・理解
理科	自然現象への関心・意欲・態度	体育	運動や健康・安全への関心・意欲・態度
	科学的な思考・表現		運動や健康・安全についての思考・判断
	観察・実験の技能		運動の技能
	自然事象についての知識・理解		健康・安全についての知識・理解
生活	生活への関心・意欲・態度		
	活動や体験についての思考・表現		
	身近な環境や自分についての気付き		

### 3 食に関する指導の評価の観点

食に関する指導の観点は明示されていないため、文部科学省「食に関する手引（第1次改訂）」（平成22年3月）の各学年の食に関する指導の目標に基づいて、各教科の観点到準じた内容で次の通り試案を作成した。

食に関する指導の目標は、「食事の重要性」、「心身の健康」、「食品を選択する能力」、「感謝の心」、「社会性」、「食文化」の六つの区分が示されている。この目標に基づいて、食生活への関心・意欲・態度、食生活を創意

工夫する能力、食生活の技能、食生活についての知識・理解を評価の観点として設定した。

### (1) 評価の観点およびその趣旨（小学校）

観点	食生活への関心・意欲・態度	食生活を創意工夫する能力	食生活の技能	食生活についての知識・理解
趣旨	食について関心をもち、その大切さに気付き、食をよりよくしようとするために進んで実践しようとする。	食について見直し、身近な課題を見付け、その解決を目指してよりよくするために考え自分なりに工夫している。	日常生活に必要な食生活に関する基礎的・基本的な技能を身に付けている。	日常生活に必要な食に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

### (2) 評価の観点およびその趣旨（中学校）

観点	食生活への関心・意欲・態度	食生活を創意工夫する能力	食生活の技能	食生活についての知識・理解
趣旨	食について関心をもち、これからの生活を展望し、食生活を充実向上するために進んで実践しようとする。	食について見直し、課題を見付け、その解決を目指して自分なりに工夫し創造している。	食に関する基礎的・基本的な技能を身に付けている。	食に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

### (3) 児童・生徒・保護者へ観点別学習状況の評価の連絡

観点別学習状況の評価を児童・生徒・保護者に、食に関する指導の目標をどこまで達成できたか周知することが必要である。小学校第1学年を例として、連絡表の試案を次の通り作成した。

〈学習状況に関する連絡票の試案 小学校・第1学年〉

学習内容	学習状況
食べ物に興味・関心がある。	A・B・C
楽しく食事をすることができる。	A・B・C
朝食の大切さが分かる。	A・B・C
嫌いな食べ物でも親しみをもつことができる。	A・B・C
正しい手洗いができる。	A・B・C
食べ物の名前が分かる。	A・B・C
食事を作ってくれた人に感謝している。	A・B・C
いただきますとごちそうさまの意味が分かり、あいさつができる。	A・B・C
友だちと仲良く食べる。	A・B・C
正しいはしの使い方が分かる。	A・B・C
正しい食器の並べ方が分かる。	A・B・C
給食の準備や後片づけができる。	A・B・C
自分の住んでいる身近な土地でとれた食べ物を理解している。	A・B・C

A とてもよくできている B できている C 努力を要する

#### 4 今後の課題

食に関する指導は、学習指導要領へ食育を位置づけたこと、食に関する指導の全体計画の作成など指導内容の充実や栄養教諭の配置により指導体制の充実がはかられていることなど、取組が進められている。

そこで、児童生徒の食に関する指導の学習評価をどのように行うかが課題である。各学校における学習評価の実態調査を行い、観点別学習状況の評価を中心にしながら、学習評価の在り方を明らかにしていくための研究に取り組んでいきたい。

#### 文 献

- 1) 中央教育審議会教育課程部会：児童生徒の学習評価の在り方について（報告）、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/)

[gaiyou/attach/1292216.htm](http://gaiyou/attach/1292216.htm), (2010 年 3 月 24 日)

- 2) 文部科学省：平成 17～23 年度の栄養教諭の配置状況（平成 23 年 4 月 1 日現在）, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/08040314.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/08040314.htm), (2011 年 10 月 7 日)
- 3) 文部科学省：小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1292898.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1292898.htm), (2010 年 5 月 11 日)
- 4) 田中耕治：教育評価，岩波書店，2008
- 5) 文部科学省：食に関する指導の手引——第一次改訂版——，文部科学省，2010